

コラム7 神社建築の不燃耐震化への挑戦—神田神社の事例—

神田神社は、神田明神とも呼ばれ、千代田区（旧神田区）に鎮座して、江戸・東京を代表する神社として親しまれてきた。関東大震災以前の神田神社には、天明2（1782）年徳川幕府によって築かれた木造社殿（写真コラム7-1）があった。当時は築地本願寺に古代インド風デザインとコンクリートを導入した建築進化論者の伊東忠太でさえ「神社は人間の住宅ではなくして神霊の在ます宮居である」がゆえに神社は永久に木造であり、その精神は不変であると主張していた。

しかし、関東大震災で1,568の神社が罹災し、そのうち神田神社をはじめ約130が焼失するという悲惨な状況を目の当たりにすると「神社は火事に遇って容易に焼け失せるものではあっては困る」という考えがようやく台頭してきた。そうした状況を受けて、1926（大正15）年に神田神社復興会が結成され、設計顧問には伊東忠太が迎えられ、設計監督には明治神宮造営や日光東照宮の修理を勤めた社寺建築の大家である大江新太郎と日比谷公会堂や早稲田大学大隈講堂などの設計者として知られる佐藤功一という二人の優れた建築家が就任し、全国の神社で初めての試みとして、神田神社は近代的な不燃耐震化に取り組むことになった。

その最大の特徴は、神社としては画期的な鉄骨鉄筋コンクリート造の構造を採用し、外観は伝統的な権現造を踏襲しながら重厚な屋根のプロポーションを実現した。さらに、コンクリートには日本で初めて総朱漆塗装が施され、柱には木造同様の枅組がモルタルで仕上げられ、柱と柱の間隔はあえて狭めて木造の比例に近づけられている。また、内部には伝統的な畳敷の空間に加えて、靴を履いたまま参拝できる空間を新設し、神宝や祭具調度品、飾り金具や照明器具にいたるまで統一したデザイン処理が施された。そして、1934（昭和9）年には不燃耐震化を実現した画期的な現在の社殿（写真コラム7-2）が完成した。

神社は木造に限るという常識を覆した神田神社の社殿は、1944（昭和19）年には空襲で油脂焼夷弾を多数受けたが消し止めることができ、その不燃化性能の高さを証明した。そして、敗戦後も変わることなく屹然と聳える神社の姿を仰いだ多くの人々が、復興の希望と勇気を見出したという。関東大震災後の神田神社から始まった神社の不燃耐震化は、災害が多発する都市の神社における優れた先駆的事例として全国に広まり、現在では多くの神社が採用するようになった。



写真コラム7-1 徳川幕府によって築かれた木造社殿（神田神社所蔵）



写真コラム7-2 現在の社殿
昭和9年竣工時（神田神社所蔵）